



いま手に持っていた本が、ふと気づくともう手になかった。どこにおいたか、いくら頭をしばってもおもいだせないというふうであった。お使いにいって、買うものをわすれてしまい、あてずっぽうに買って帰って、まるでラジオで大きく落語みたいだと笑われたこともあった。

もどから久助君は、どうかするとみなれた風景や人びとの姿が、ひどく殺風景にあじきなくみえ、そういうもののなかにあって、自分の魂が、ちよつと茨のなかにつっこんだ手のようにいためられるのを感じるころがあったが、このころはいつそうそれが多く、いつそうひどくなった。こんなつまらない、いやなところに、なぜ人間はうまれて、生きなければならぬのかと思って、ぼんやり庭の外の道をながめていることがあった。また、冷たい水にわずか五分ばかりはいつただけで、病気にかかり死なねばならぬ(久助君には兵太郎君が死ぬとしか思えなかった。)人間というものが、いつそうみじめな、つまらないものに思えるのであった。三学期の終わりのころ、ついに兵太郎君が死んだということを久助君は耳にした。弁当のあと久助君は教壇のわきでひなたぼっこをしていた。すると、向こうのすみで話し合っていた一団の中から、

「兵タンが死んだげなぞ。」

とひとりがいった。

「ほうけ。」

と他の者がいった。べつだんおどろくふうもみえなかった。久助君もおどろかなかつた。久助君の心は、おどろくには、くたびれすぎていたのだ。<sup>45</sup>

「うらのわら小屋で死んだまねをしとったら、ほんとに死んじゃったげな。」

とはじめのひとりがいうと、他の者たちは明るく笑って、兵太郎君の死んだまねや腹痛のまねのうまかつたことをひとしきり話し合った。

久助君はもうきいていなかった。<sup>6</sup> ああ、とうとうそうなつてしまった

50

のかと思った。そつと片手を床の上の陽なたにはわせてみると、自分の手はかさかさして、くたびれていて、悲しげに、みにくくみえた。

日暮だった。

久助君の体のなかに漠然とした悲しみがただよっていた。

昼のなごりの光と、夜のさきぶれの闇とが、地上でうまくとけあわなような、妙なちぐはぐな感じのひとときであった。

久助君の魂は、長い悲しみの連鎖のつづきをくたびれはてながら、旅人のようにたどっていた。

六月の日暮の、微妙な、そして豊富な物音が、戸外にみちていた。それでいて静かだった。

久助君は眼を開いて、柱にもたれていた。何かよいことがあるような気がした。いやいやまだはつづくのだという気もした。

すると遠いざわめきのなかに、一こえ仔山羊のなき声がまじったのをききとめた。久助君はしまったと思った。生まれてからまだ二十日ばかりの仔山羊を、ひるま川上につれていって、昆虫を追っかけているうちついで帰ってきたのだと確信をもって思った。それと同時に、仔山羊はひとり、久助君は山羊小屋の横へかけ出していった。川上の方をみた。

久助君は向こうからやってくる。

久助君にはほかのものは何も眼にはいらなかった。仔山羊の白いかれんな姿だけが、仔山羊と自分の地点をつなぐ距離だけがみえた。

仔山羊は立ちどまっては川縁の草をすこし喰み、またすこし走っては立ちどまり、無心に遊びながらやってくる。

久助君はむかえにいこうとは思わなかった。もうたしかにここまでくるのだ。

仔山羊は電車道もこえてきたのだ。電車にもひかれずに。あの土手の

75

こわれたところもうまくわたったのだ。よく川に落ちもせずに。

久助君は胸が熱くなり、なみだが眼にあふれ、ぼとぼと落ちた。

仔山羊はひとりで帰ってきたのだ。

⑨ 久助君の胸に、今年になってからはじめての春がやってきたような気がした。

⑩ 久助君はもう、兵太郎君が死んではいない、きっと帰ってくる、という確信を持っていたので、あまりおどろかなかった。

教室にはいると、そこに——いつも兵太郎君のいたところに、洋服に着かえた兵太郎君が白くなった顔でにこにこしながら腰かけていた。

85 久助君は自分の席についてランドセルをおろすと、眼を大きく開いたまま、兵太郎君をみてつっ立っていた。そうすると自然に顔がくずれて、兵太郎君といっしょに笑い出した。

兵太郎君は海峡の向こうの親戚の家にもらわれていったのだが、どうしてもそこがいやで帰ってきたのだそうである。それだけ久助君は人からきいた。川のことでもとで病気をしたのかしなかったのかはわからなかった。だがもうそんなことはどうでもよかった。兵太郎君は帰ってきたのだ。

⑪ 休憩時間に兵太郎君が運動場へはだしでとび出していくのを窓からみ

たとき、久助君は、しみじみこの世はなつかしいと思った。そしてめつたなことでは死なない人間の生命というものが、ほんとうに尊く、美しく思われた。

(新美南吉「川」)

\*1 兵太郎君は二、三か月前に久助君たちと川遊びをしていて、体のぐ

あいが悪くなり、それから学校へ来ていない。

\*2 閩門や出入り口などのしきりにしく横木。

\*3 茨とげのある低木。

\*4 喰む食べる。

問1 —— 線①「自信をもっていった」音次郎君のことは、どこから

どこまでですか。文中から初めと終わりの六字を書きぬきなさい。


問2 —— 線②「ふたり」とはだれとだれですか。


問3 —— 線③「ふたりの足はとまらなかった。むしろ足ははやくな

た」とありますが、このときの「ふたり」の心情を述べたものとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 兵太郎君の家のなごやかなふんいきを感じ、これなら兵太郎君も元気にちがいないと確信している。

イ 兵太郎君の家のしんとしたふんいきが兵太郎君の病気の重さを物語るように思え、不安が強まってきている。

ウ 二人とも猫が苦手なので、飛びかかられたらどうしようと、おびえている。

エ 家の中からも兵太郎君が出てきたら、どんな話をすればよいかわからないと、とまどっている。

問4 —— 線④「何かしかけてわすれてしまうようなことが多かった」とありますが、そのような久助君のお使いの様子をたどえた八字の

ことを文中から書きぬきなさい。




◆ 文の成分

文は次のような型に分けることができます。

- ① 何(だれ)が—何だ。
- ② 何(だれ)が—どうする。
- ③ 何(だれ)が—どんなだ。
- ④ 何(だれ)が—ある(いる/ない)。

右の型の「何(だれ)が」にあたる部分を主語、「何だ」「どうする」「どんなだ」「ある(いる/ない)」にあたる部分を述語と言います。

主語や述語のように、文を組み立てている文節を、はたらきの上から分けたものを文の成分と言います。

例 父は 音楽家だ。  
主語 述語

山は 高い。  
主語 述語

家が ある。  
主語 述語

文の中で、他のことばをくわしく説明する(修飾する)ことばを修飾語と言います。

例 今日、ぼくは パンを 食べた。  
修飾語 主語 修飾語 述語

「今日」はいつ「食べた」のか、「パンを」は何を「食べた」のかを示し、ともに「食べた」をくわしく説明しています。

文の成分には他に、前後の文やことばをつなぐはたらきの接続語、他の部分からわりあい独立している独立語があります。

1 次の各文は、あとの文の型のどれにあたりますか。それぞれ記号で答えなさい。

- (1) あなたの考え方はとてもすてきです。 ( )
- (2) ぼくが今食べたいのはたいやきだ。 ( )
- (3) 隊長は司令室の中にいます。 ( )
- (4) 春にはいろいろな草花が芽を出す。 ( )

ア 何(だれ)が—何だ。  
 イ 何(だれ)が—どうする。  
 ウ 何(だれ)が—どんなだ。  
 エ 何(だれ)が—ある(いる/ない)。

2 次の——線部の述語に対応する主語を一文節で書きぬきなさい。

(1) 三角定規も算数の勉強に必要な道具です。

(2) 一人でできないときはぼくが手伝うよ。

3 次の——線部の主語に対応する述語を一文節で書きぬきなさい。

(1) 空は時間によって色をころろ変える。

(2) ぼくらのかくれがは森の木の上にある。

**4** 次の各文から、主語と述語をそれぞれ一文節で書きぬきなさい。

(1) 波に反射した光がきらきらとかがやく。

主語

述語

(2) 本当に一人であるすばんをするのね、あなたは。

主語

述語

(3) ぼくは君の絵をすばらしいと思うよ。

主語

述語

(4) 一体だれが勝つだろうか、明日の試合で。

主語

述語

**5** 次の——線部の修飾語は、どのことばをくわしく説明していますか。

一文節で書きぬきなさい。

(1) あさって、ぼくは父といっしょに北海道に行きます。

(2) あの人はギョーザを腹いっぱい食べたいと言っています。

(3) 月にはうさぎがもちつきをしているように見える模様がある。

(4) 春に花だんに植えた花が、今はきれいにさいています。

(5) とても大きなトラックが目の前を横切った。

**6** 次の——線部のことばをくわしく説明している修飾語をすべて書きぬきなさい。

(1) わたしたちは、何度も水を飲んだ。

(2) とても大きく強そうなカブトムシに糸をつけて引張らせた。

(3) あなたにわたしの友人が手紙を預けたと聞いたのですが。

(4) 木のかげから現れた男は、さっと地図をわたすとすぐにいなくなつた。

(5) 毎日ここで、かみが白くてせの低いおばあさんがジュースを買っています。